

めくら星

小川未明

青空文庫

それは、ずっと、いまから遠い昔のことでもあります。

あるところに目のよく見えない娘がありました。お母さんは、娘が、まだ小さいときに、娘をのこして、病氣のため死んでしまいました。その後にきましたお母さんは、この娘を、ほんとうの自分の産んだ子供のようにかわいがらずに、なにかにつけて娘につらくあたりました。

娘は、目こそあまりよく見えませんが、まことにりこうな女の子でありました。そして、後にきたお母さんに産まれた、弟の三郎の守りをしたり、自分のできるかぎりの世話をしたのであります。

こんなにおとうと、弟をかわいがりましたのにかかわらず、お母さんは、やはり娘を^{むすめ}目の敵にしました。お母さんは、じつにものの道理のわからない人でありましたけれど、弟の三郎はこの姉を慕い、そのいうことをよくきく、いい子でありました。

三郎は、一羽のかわいらしい小鳥を飼っていました。その小鳥は、羽の色が美しいばかりでなく、いい声を出して、朝から晩までかごの中でさえずりうたいましたから、三郎はこの小鳥を愛したことは一通りでありませんでした。また三郎のいちばん大事にしていたのは、この小鳥であつたことはいうまでもありませんでした。

いじの悪い母親は、娘に向かつて、

「おまえは、毎日鳥に餌と水をやりなさい。そして、もし鳥をにがすようなことがあったなら、そのときはたいへんだ。そうすれば、もう、おまえはこの家から出ていくのだ。けっして、家に置きはしないから。」といいました。

おとなしい、目のよく見えない娘は、どんなに、この母親のいいつけを当惑したでありましょう。

小鳥は、そんなこととは知らず、朝からかごの中でとまり木にとまって、ないたり、さえずつたりしていました。そして、細いかごの目から、遠い空などをながめていますうちに、小鳥はどうかして、広い世へ出て、自由に、あの青々とした空を飛んでみたいものだと思つたのであります。

小鳥は、自分の友だちらが、木の枝や、かなたの空でないとい
るのを聞きますと、その気ままな生活がうらやまれたのであり
ました。自分もどうかして、このかごの中から逃げて出て、せめ
て一目なりとも、世の中のさまざまな景色を見たいものだと思
いました。

こう小鳥が外にあこがれていますうちに、ある日のこと、目の
よく見えない娘は、餌猪口をかごの中に倒して、それを直そうと
き、気をもんでいました。小鳥は、娘の手とかごの入り口のところに
すきまのあるのを発見しましたので、すばやく身をすぼめて、
ついとそこから、外に逃げ出してしまいました。

小鳥は、まず屋根の上に止まりました。そして、これからどつ

ちへ向^むかつて逃^にげていったらいいかと、しばし思案^{しあん}にふけたの
 です。そのとき、家の内^{いえうち}では、なんだか大騒^{おおさわ}ぎをするようなよ
 うすでありましたから、まごまごしていて捕^とらえられてはつまら
 ないと思^{おも}いましたので、一^{ひとこえ}声高くないで、遠^{えんぼう}方に見^みえる、こ
 んもりとした森^{もり}影^{かげ}を目^めあてに、飛^とんでいつてしまいました。
 娘^{むすめ}は、小鳥^{ことり}を逃^にがしてしま^きうと、たいへんに驚^{おどろ}き悲^{かな}しみました。
 どうしらいいだろうと気^きをもみましたけれど、なにぶんにも目^めが
 よく見^みえませんが、どうすることもできないので、ただ、うろ
 うろ騒^{さわ}いでいました。

このとき、三^{さぶろう}郎^{あね}は姉^{あね}のそばに駆^かけてきまして、
 「姉^{ねえ}さん、鳥^{とり}はどこへいったの！ 僕^{ぼく}の大事^{だいじ}にしておいた鳥^{とり}はい

なくなつてしまつた。僕は、どうしたらいいだろう。」と泣き出しました。

やさしい姉は、弟をいたわつて、

「三郎さん、わたしが悪かつたのだから、どうか堪忍しておくれ。あんなに三郎さんがかわいがつていた鳥を逃がしてしまつて、わたしが悪かつたから、どうか堪忍しておくれ。きつとわたしが鳥を探して捕まえてきてあげるから、泣かないでくれ。」といいました。

この物音を聞きつけた母親は、なにごとが起こつたかと思つて、奥から出てきました。そして、その次第を知ると、たいへんに怒りました。

「三郎のあんなに大事だいじにしておいた鳥とりを逃にがしてしまつて、おまえはどうするつもりです。いつかの約束やくそくですから、さあ、おまえは、この家うちから出でていつてしまうのです。どこへでもかつてにいつてしまふがいい。」と、母親ははおやはいいました。

娘むすめは手てを合あわせて、けつして悪い気わるきでしたのではないから、許ゆるしてくださいと泣ないてわびましたけれど、もとより、これを機き会かいに娘むすめを追おい出だしてしまふ考かんえでありましたから、母親ははおやはなんといつても娘むすめの過あやちを許ゆるしませんでした。弟おとうとの三郎さぶろうは、姉あねがかわいそうになりましたので、ともに母親ははおやのたもとにすがつて許ゆるしを請こいましたけれど、母親ははおやはついに許ゆるさなかつたばかりでなく、娘むすめを家いえから外そとへ追おい出だしてしまいました。

「そんなに家へ入りたければ、逃げた鳥を探して捕まえてくるがいい。」と、母親は、娘を後目にかけてしかったです。

娘はやつと顔を上げて、

さぶろう

「三郎さん、わたしは、きつと鳥を探して捕まえてきてあげますよ。」と、涙ながらにいました。そして、彼女は、いずこ

へともなく立ち去ってしまったのであります。

むすめ

娘は、空になったかごをぶらさげて、あてもなく町から村へ出

むら

て、村からまた野原へと、さまよい歩いたのであります。

もしやどこかで、聞き覚えのある鳥の声はしないかと、耳を傾

みみかたむ

けましたけれども、あたりは、しんとして、なんの鳥のなく声もしなかったのであります。

「どうか、鳥とり！ 鳥とり！ このかごの中なかへ帰かえっておくれ。おまえが
 帰かえってくれないと、わたしは家うちへ帰かえられないのだから、どうかこ
 のかごの中なかに帰かえってきておくれ。」と、娘むすめは、あてもなく逃にげて
 いったしまった鳥とりに向むかって、独ひとり言ごとのように頼たのみました。しか
 し、どこからも鳥とりの飛とんで帰かえってくるようすがありませんでした。
 娘むすめはしかたなく、野原のほらをさまよって、だんだん森もりの中なかから、山やま
 のふもとへ歩あるいてきました。そのうちに日ひはしだいに暮くれかかっ
 たのです。

「どうしたらいいだろう。もし鳥とりがこのかごの中なかに帰かえってきてく
 れなければ、わたしは、弟おとうとに対してすまない。お母かあさんは、わた
 しの過あやまちをけっして許ゆるしてはくださるまい。しかたがないから、

わたしは死しんでしまおう。」と、決けつ心しんしながら、とぼとぼと、

なおも途みちを歩あるいてきました。

高たかい山やまの端はしが、赤あかく、黄きいろ色いろく色いろづいては、いつしか沈しずんでしま

いました。娘むすめは悲かなしく、日ひの沈しずむのをながめました。もう家いえを出で

てからだいぶ遠とおく歩あるいてきました。いまごろ、弟おとうとや、お母かあさんは、

どうしていられるだろうと思おもうと、さびしく、頼たよりなくなつて涙なみだ

がわいて出でてきました。

そのうちに、彼かの女じよの歩あるいている路みちは、いつしか尽つききてしまつ

て、目めの前まえに青あおい青あおい池いけが見みえました。日ひはまったく暮くれて、空そら

の星ほしがちらちらとその静しずかな水みづの上うへに映うつっていました。

娘むすめは、目めがよく見みえませんが、この深ふかそうに青あお黒くろく見みえ

る、池いけの面おもてに映うつつた星ほしの光ひかりだけはわかりました。彼女かのじよは、ずつ

とその池いけの面おもてを見みつめて、死しんでしまおうかと思案しあんしていました。

ちようどそのとき、水みずの中なかから、

「姫ひめ、姫ひめ、どの星ほしになる。金きんの星ほしか。銀ぎんの星ほしか。それとも紫むらさき

いろの星ほしか。」という声こえが聞きこえたのであります。

娘むすめは、これはきつと、神かみさまが自分じぶんを救すくつてくださるのだろう

と思おもいました。お星ほしさまになつたら、もういままでのようかなに悲かなし

いこともなければ、またつらいこともなからう。そして、なつか

しい真実ほんとうのお母かあさんにあうこともできれば、また三郎さぶろうさんの

大事だいじにしていた鳥とりを、世界せかいじゆうめぐりめぐつて探さがすこともでき

るだろうと思おもいました。

また、このとき、水みづの中なかから、先刻さつきと同じ声おなこえで、

「姫ひめ、姫ひめ、どの星ほしになる。金きんの星ほしか。銀ぎんの星ほしか。それとも紫むらさき

いろの星ほしか。」と、姿すがたが見えないけれど、同じことおなをいいました。

むすめかんが
娘むすめは考えて、

「金きんの星ほしになる。」と答こたえました。すると、

「金きんの星ほしは早いぞ。早はやく出でて、遅おそく入はいる。」と、また水みづの中なかから

いいました。

むすめ
娘むすめは、これこは、金きん星せいは、早はやく空そらに出でて、遅おそく海うみに入はいるのだか

ら、早はやく池いけの中なかに飛とび込こめというのだらうと思おもいましたから、さ

つそく手てを合あわせて、神かみさまに祈いのりながら、ざんぶりとばかり、

みずみずの中なかに身みを投なげ込こんでしまったのであります。

その夜から、空に、金色の新しい星が一つ増えました。

けれど、その星は、めくら星でありました。ほかのお星さまの

ように、遠く、高く、地から離れて、天上界に住むことがで

きないのであります。毎夜、森や、林や、野の上近くさまよつて、

このお星さまは、なにか探ねています。それは、死んだ姉が、な

お、弟のかわいがつていた鳥を探しているのです。

ある日のこと、山や、森や、林や、河は、みんないつしよに集

まつて相談いたしました。

「あのめくらの星は、ほんとうにかわいそうだ。」

「毎夜、この下界の近くにまで降りてくる。もし、山や、森に突

きあたつたらどうするつもりだろう。」と、彼らはたがいに話し

あ
合いました。

「こりや、おれたちが、あの星^{ほし}に注意^{ちゅうい}してやらなけりやならな
い。」

「そうだ。それがおれたちのすべきことだ。」と、彼^{かれ}らは、また
いいあいしました。相談^{そうだん}がすむと、彼^{かれ}らはたがい^{わかれ}に別^{わか}れてしま
いました。

どんな晩^{ばん}も、雨^{あめ}の降^ふらないかぎりは、めくら星^{ほし}は、金^{きん}色^{いろ}に光^{ひか}
つて、下^げ界^{かい}に近^{ちか}く空^{そら}をさまよいます。みなさんは、金^{きん}色^{いろ}に輝^{かがや}く
お星^{ほし}さまが、山^{やま}の頂^{いた}にとどきそうになつて過^すぎるのを見^みるであり
ましょう。そのとき、ふもとの谷^{たに}川^{がわ}は、声^{こえ}をかぎりに叫^{さけ}びます。
また、森^{もり}には、風^{かぜ}が起^おこつて、ゴーゴーと鳴^なります。ある山^{やま}は、

赤い火を噴いて、星に警戒します。

めくら星は、高い山の頂につきそうになつて、この物音を聞きつけて、さも寒そうに身ぶるいしながら、青い青い夜の空をあてもなく、無事に過ぎてゆきます。

神さまは、めくら星となつた娘を、かわいそうだと思われました。けれど、逃げた小鳥にべつに罪のあるわけでありませんから、それを罰することができませんでした。ただ、めくら星が毎夜、地に近く降りて鳥を探しているのを不憫と思われて、これはいくらか探してもわからうはずはないから、逃げた鳥は、ほかの鳥のように昼間はないたり、さえずつたりさせずに、夜にかぎつてないたり、さえずつたりさせてやろう。そうすれば、めくら星はきつ

と、そのなき声こえを聞きつけて探しあてることができらうと、
 神さまかみは思われたのであります。

森もりに、山やまに、林はやしに、みんなほかの鳥とりは昼間ひる太陽たいようの輝かがやいている

間は、あいだあいだ、おもしろく、楽しく、こずえからこずえにさえずり渡わたつて

いるのを、ひとりひと、昼間ひるまは眠ねむつて、真まつ暗くらな夜よるの間眠あいにねむることができ

ずに、反対はんたいにないている鳥とりがあります。これは、昔むかし、かごから

逃にげていなくなつた鳥とりの子孫しそんらであります。しかし、めくら星ぼしは、

永えい久きゆうに森もりの中なかに近ちかづくことができません。空むなしく、はるかに

ほととぎすや、ふくろうのなき声こえを聞きながら、高い山たかやまの頂いただきを過す

ぎるのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 Ⅰ」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「おとぎの世界」

1919（大正8）年6月

※表題は底本では、「めくら星《ぼし》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

めくら星

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>